慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小葉田淳著 史説日本と南支那
Sub Title	
Author	高村, 象平
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1943
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.37, No.7 (1943. 7) ,p.666(104)- 671(109)
JaLC DOI	10.14991/001.19430701-0104
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19430701-0104

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小葉田淳著「史說日本と南支那」

高村象平

臺北帝大教授小葉田淳氏は、曩に「中世南島通交貿易史の研究」（昭和十四年刊・日本評論社發行）を以て室町時代における琉球と日本本土・明・暹羅・舊港（パレンバン）・滿剌加との通交貿易についての深き研鑽を發表され、次いで「中世日支通交貿易史の研究」（昭和十六年刊・刀江書院發行）を以て遣明船貿易及びその廢止後繼起せる事態について委曲を盡した著書を公けにされ、近くは「改訂增補日本貨幣流通史」（昭和十八年刊・刀江書院發行）を以て昭和五年初版の同名の著書よりも二百餘頁を加へ我が國の中世より近世初期に至る間の貨幣流通發達の眞相を闡明されたのであるが、その間昨年十月「史說日本と南支那」と題する二百五十頁圖版十二葉の書を臺北市の野田書房より上梓された。私は頃日入手、通讀することが出來たので、いま機會を得てこれを紹介したいと思ふ。

本書は本邦と南支那との交渉に由緣ある九篇の論文を集めたものであるが、序文によればこれ等諸論稿は教授が目下從事されてゐる「室町時代以後鎖國に至る日支通交貿易史の研究」の間に生れた副產物であるといふ。分量よりすれば一、二を除いて小篇ともいふべきものであらうが、然し教授の前記諸著書に親しんだ人々にとつて熟知せられてゐる如く、その孰れもいさゝかも考證を忽せにさるゝことなき克明な論考であり、且つ一度雜誌や新聞に發表された後に修補の勞を下すことを惜んでをられぬものである。しかもその雜誌といひ新聞といひその一つを除いて總て臺灣島內で發行されたものに係はる故、これ等に親しみ難い內地に在る吾々にとつては本書の公刊は頗る意義あるものといはねばならない。

先づ第一論文「歷史上より觀たる我が國と福建との關係」は、遣唐使時代以降の我が國と福建との通交・文化傳播關係を概觀されたものであり、特に我が國に來航せる宋商に福建人多きことを實證され、これを中心に宋學・禪風の東漸、優秀な大陸の雕工の來朝が我が印刷文化に及ぼせる貢獻を述べられてゐる。第二論文「明代漳泉人の海外通商發展」と第四論文「福州柔遠驛について」の二篇は前著「中世南島通交貿易史の研究」の記載を補はれたもので、前者は同書三六〇——三六七頁の海澄稅關の餉稅制度において省略された盤驗及び密航・洩貨・洩稅等の防止や餉稅制の崩壞を述べ、更にこの時代の日明貿易の展開の概要と福建南部の漳州泉州の船人がこれに占める決定的役割とを、西班牙や和蘭等の外國側史料の周到な檢討とも俟つて說かれてゐる。前著には、文引は「當初每次一百張を以て率とし」「東西二洋の船數は定限のあつた事は自明であるが、每船に對し、唯東西二洋を分つたのみで、各洋の何地に赴くべきかといふ事は限定されてゐなかつた」（三六二頁）とされてゐたのであつたが、本論文では「當初は每次給引五十張を以て率とし每國二、三艘の通商に限定した」（三三頁）と改められてゐる。又嘉靖の海寇については前著四八六—四九八頁に說かれたところであるが、本書においても寇船と商船とを同一視することを不當とされ「商變じて寇となるといふ事は、支那人に就いて一般にいひ得る事で、邦人に對しては彼に於ける程度には妥當しない」（五八頁、一三八頁）と力說されてゐる。後者卽ち第四論文は、福州において琉球使臣を館寓せしめる柔遠驛について既に前著二一二—二三一頁に述べられるところがあつたが、これを新たに琉球側の資料（歷代寶案）に基づき順治五年以來嘉慶九年に亙る間の館驛の修築に關して補說されたものである。第三論文「福建人と近代の日支交涉」は、九州各地に

來居した支那人の中で數においても勢力においても福建人が優越してゐたことを指摘され、特に長崎の住宅唐人について詳細であり、又我が文化史上における福建との交渉を隱元大師を盟主とする禪僧の來朝と黃檗宗の傳來とを中心に述べられてゐる。

以上の四篇は我が國と福建との關係を主としたものであるが、第五論文「歷史上より觀たる我が國と潮汕地方との交渉」は福建と自然的經濟的條件において類似した潮汕地方（廣東東部）の通商並びに海運が我が國に對して有した關係を取扱ふ。そしてこの潮州・福建兩地方の船舶の長崎來航が貞享及び元祿初年に高潮に達して以後減退し、代つて寧波・南京を主とする浙江・江蘇の船舶が絶對的に優位を占めるに至つた理由を、敎授は康熙二十三年從來の禁洋が解かれたことに求められる。即ち支那船の海外通商が嚴禁されてゐる間、禁制を犯して兩地方人の敢爲性は最もよく發揚されたのであつたが、右の開禁によつて江浙人の活動は自由となりその豐富なる資本と最大なる貿易貨物、更に我が國に對するその地理的優越性は、彼等江浙人の日本貿易を優越ならしめたのであつた。この他方康熙の開禁は、泉漳・潮汕地方の船人の南海方面に對する活動を一層自由ならしめることになり、南洋華僑がこの頃から增加したのも自らこれに伴なふ事象であつたといはれてゐる（一六一―一六二頁）。尙敎授は貞享・元祿・寶永年間における長崎來航の支那船の中から福建・廣東・江浙船を選び出されるに當つて「記錄に某地仕出船とあるは、船頭よりの申達に據るは勿論であるが、之は頗る便宜的の決め方で、該船の始發地を指すとは限らず、途中の寄泊地を冠する場合も多い」（一四六―七頁）と適切なる注意を拂はれてゐる。これは私自身獨逸ハンザ船舶の通商の程度を考量する場合に屢々痛感するところなので、本書における數頁の圖表を作成する背後に潛められた敎授の勞苦が如何に大きなものであつたか、その一部分なりとも感得することが出來るやうに思つたことである。

第六論文「海南島外國貿易史」、第七論文「海南島外國貿易史補說」は、唐代特に宋代以降アラブ商人の來商、支那商人の往市、南海各地よりの支那通貿通商が益々盛となり、その途上の要衝に位置せる海南島が外國貿易に關與し來る事實に筆を起し、寬文より正德に亙る約五十年間に海南仕出しと稱する商船十餘隻が長崎に來航通商したことを述べ、下つて第十九世紀中葉の天津條約により瓊州が歐米諸國に開放されてからは綿絲・石油等の急激な輸入增加に基づき島產の幼稚な家內工業品が大打擊を蒙つたことまで說かれてゐる。行文の途中において、蠻民が元人にして明朝興起後遂はれて水上に居住するものとなつたとの傳說は明季淸初の後に釀されたものであらうと述べられてゐる（一九八頁）。

次に應永十五年若狹に、又同二十六年薩摩に來着した南蠻船は從來爪哇船と想定されてゐたが、敎授は先年歷代寶案中より琉球・舊港關係の文書を得て、右の南蠻船がスマトラの舊港（パレンバン）の船なることを明かにされ、これを前著「中世南島通交貿易史の研究」（四五五―五〇二頁）において說かれたのであつた。いま二十六年の南蠻船について新たに島津公爵家文書により更にその論旨を確認されたのが、本書の第八論文「應永年間來航の南蠻船に關する一文書」である。短文ではあるが、史實の斷定に際し極めて愼重な態度を持することの必要を示される上に好個のものである。しかも敎授のこの努力にも拘はらず今尙舊說はその姿を消さない。例へば舟越康壽氏の新著「東南アジヤ文化圈史」（三省堂發行）一一九―一二〇頁に、應永十五年の南蠻船は「ジャワの使船であつたであらうとせられてゐる」と述べ、應永二十六年のものは「何處の船であつたか不明である」とされてゐる如きである。この書には右の箇所に續く章節の參考文獻として小葉田敎授の前揭書も揭げられてゐる以上、舊港船說について一言されて然るべきであつたと考へるのは無理であらうか。素々舟越氏の新著は、從來我が國に欠けてゐた東南亞細亞の歷史につ

いての概觀書である。同氏自らいはれる如く、「東南アジヤ史の通觀といふ如きは先人の業績に範を求めることが困難であり、時代區分、史實の配列、叙述の方法等殆どすべて筆者の創意に俟たねばならず、相當の苦心を要したのであつた」とは、私も亦さこそと同感を禁じ得ないのであるが、然しその他方において、謂ゆる入門書であるだけにその叙述は愼重でありたいと考へざるを得ない。この爪哇船と舊港船との問題は、單に船籍の如何だけにとゞまるものではなく、及んでは當時のパレンバン（スマトラ）と爪哇との政治的支配關係の如何にも關聯することに想到するならば、尙更周到な用意を必要とすると思ふのである。

いさゝか書評の筆はそれたが、本書最後の論文「砂糖の史的研究」は、我が國における近世初期以前の砂糖輸入の史的事實を中心に、享保年間以來の國內糖業の勃興事情をも併せて述べられたものである。我が國に砂糖製造の最も古く傳へられたものとして、慶長年間奄美大島の直川智が閩地方に漂着し製糖法を得て歸國したと傳へるが、これについて教授は「直川智が大島糖業史上に貢獻せる事の大なる事は何人も疑はない。然し公平にいつて直川智の所傳は高き史料的價値あるものではない。直川智の所傳は所傳として保存するは勿論必要なる事實なるも、大島製糖の創始に就いては猶價値高き史料の發見考覈によつて之を批判すべきものと思ふ」（二二六頁）とて、愼重な態度を持されてゐる。これと對蹠的な態度として感じたのは、田村榮太郎氏の近著「日本工業前史」（東洋堂發行）に記載されたところであつて、田村氏は直川智の所傳を引き「少し怪しい點があるけれ共、この頃黑糖を製するに至つたのは事實である」（三一〇頁）と甚だ簡單に片付けられてゐる。孰れを以て是とし非とするかは措いて、この二つの態度の存在することをこの機會に附記して置きたい。尙小葉田教授が本論文において、室町時代の輸入砂糖は遣明船貿易よりは琉球人の海外貿易を介して將來したものゝ多きことを述べられてゐることは（二三一―二頁）、注目すべきであらう。

以上は本書の要旨を摘記したに過ぎない。教授は序文に「本書に收めた九の小篇は、もとより多くは研究の名に値せぬものである」と謙遜されてゐるが、その當らざることは本書に接した者の等しく感ずるところであらう。「史說」と題してもそれは巷間に往々見る體のものでは決してない。南方研究に眞に關心を有する人々に對しては勿論、廣く一般の人士にも本書に就かれんことを要望し、他方教授がこゝ數年來從事されてゐる大業の完成を待望してやまない次第である。